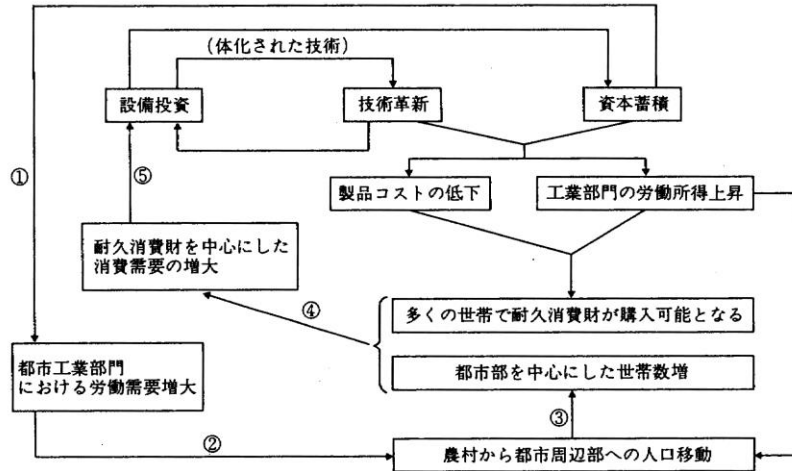


吉川氏の「高度経済成長のメカニズム」における消費需要の強調

吉川洋（1992）『日本経済とマクロ経済学』東洋経済新報社

図 2.3 高度成長（1955—70年頃）のメカニズム



たしかに梅村 [1961], 南[1970], 小野 [1972] 等の分析で明らかにされているように, 農村から都市部への人口移動は特に短期的な循環局面では経済成長の結果といえる. しかしここでは成長・循環のプロセスを人口移動→世帯数増→内需の拡大→成長→人口移動という一つの輪としてとらえた上で, 比較的論じられることの少なかった人口移動→内需の拡大という側面を強調しておきたい (図 2.3).

以上 83 頁

以上の議論を図 2.3 に即して要約すれば, Lewis モデルで強調される資本蓄積→近代部門における労働需要増大→人口移動 (図中の①, ②) に加えて, 人口移動→世帯数増→耐久消費財を中心とした消費需要の増大→資本蓄積 (図中の③, ④, ⑤) という有効需要に関連した側面をここでは強調したい. もっともこうした人口移動・世帯増が国内需要を盛り上げるというメカニズムは, 高度成長のプロセスでキーとなる財が耐久消費財であったという事情に強く依存

以上 85 頁

している. 実はこの点こそが戦前の経済成長と戦後の高度成長の最大の相違点であるとも考えられる. すなわち戦前の日本経済の成長と循環においては輸出が決定的な役割を果たしていた (篠原 [1961], 吉川・塩路 [1990] 参照) から, そこでは人口移動が輸出主導によってもたらされる近代部門の成長のほぼ一方的な結果であった. これに対して戦後の高度成長においては, くり返し述べているとおり広範な耐久消費財需要を生み出す要因の一つとして, 人口移動・世帯増が成長と循環の中心にある設備投資・資本蓄積を支える究極的な要因になっていたのである.

以上 86 頁